

## ● 書 評 ●

John Pheby, *Methodology and Economics — A Critical Introduction*, The Macmillan Press Ltd., 1988, pp.xii + 145

[浦上博達・小島照男共訳, 『経済学方法論の新展開』(現代経済哲学シリーズ1), 文化書房博文社, 1991年, xxi + 264頁]

Deborah A. Redman, *Economics and the Philosophy of Science*, Oxford University Press, 1991 (Paperback 1993), pp.xiv + 252

[浦上博達監訳・橋本 努訳, 『経済学と科学哲学』(現代経済哲学シリーズ3), 文化書房博文社(近刊)]

浦 上 博 達

ここで両書を併せて論じるのは、両書が次のような共通項を有するからである。現代の科学哲学論争とおよびそれが経済学に与えた影響の解説を主題としていること。両著者共に、経済学における物理学的科学主義に反対し、特に、Popperの反証主義に与しない立場に立っていることである。

自然科学における現代の方法論争と同じく、経済学の歴史においても、方法論についての関心は伝統的に存在している。特に、19世紀後期のG. SchmollerとC. Mengerに代表される「方法論争(Methodenstreit)」(Pheby, p.11, 邦訳, 19頁)は固有名詞として語り継がれるほど、経済学者もまた経済学方法論に真剣な問題意識をもち、激しい論争を闘わせた時期があったのである。しかしながら、その解決をなかば曖昧なままに残しておきながら—これは、方法論争がいつも辿る結末なのだが—、その後の経済学の展開は、イギリス古典学派の流れのなかで物理学的科学主義を底流として押し進められた。そうした方法論への疑いや批判はいつも存在したが、それは流れの傍らに浮いたあぶく程度のものではあった。「科学的」経済学が大きな流れになるためには、それ自体がいくつかの闘いをしいられたし、またいくつかの支流も生じたが、経済学が職業化するにつれてそれは大河となっていった。そしてそれには、外的な制度的要因と内的な心理的要因が加わっていた。職業上の徒弟制的作用は、職を得るために意識的に機能した。このことは、Redmanによって本書でもとりあげられている(Redman, p.158-59)。一方の、内的な嫌悪感情とでもいうべきものは無意識のうちに作用した。方法への疑いは「価値判断」という沼地に足を滑らすことになる。そこには、ドグマという有毒ガスがいくつもブツブツと吹きだしている。データというパットを入れた細身の数学的スーツは泥まみれになり、なんらの量的な「科

学的」業績も生みださない不毛さがベタつく。幸いにも科学につづく道は、この沼地から「価値自由」という垣根で守られていたが、しかし、この沼地を見たくないという無意識の感情を抑えるには、さらに「確たる」方法論を有していることを自己に納得させなくてはならなかった。こうして経済学の主流は、科学への道をすでに歩いていた物理学を、見習うべき模範的な上級生として後に従ったのである。その努力の結果、「社会科学の女王」(Redman, p.104) という、他の社会科学を見下す高台に到達できた。ここにいたって、ニュートン流の力学的科学主義に始まった経済学における物理学的科学主義がその「確たる」方法論となったのである。そして近年のそれは、この物理学的科学主義(実証主義)の核である「検証」に対する不安に駆られてとびついた Popper の反証主義であった。このため Popper は、経済学に名ばかりの大きな影響を与えたのである。しかしながら、Popper の反テーゼとして(社会科学にその発想の原点をもつ) Kuhn がパラダイム論を展開するに及んで、それまで Popper を戴くことで安心していた経済学者に動揺が生じた。というのも、Popper の反証も、結局は検証と同じ困難を抱えていたからであった(Pheby, pp.29-32, 邦訳 50-56 頁, Redman, pp.116-29)。そこで次に、こうした主流派経済学者は、実際には競合者の Kuhn と同質でありながら Popper の流れを主張する Lakatos を、Popper の代わりとして見つけたしたのである。Redman の書でも、ほぼこうした主張 (Redman, p.vii, p.144) がおびただしい文献でもって「裏付け」られている。

1970 年代のいわゆるスタグフレーションから生じた「経済学の危機」は、科学哲学の分野で燃え上がっていた方法論争が飛び火しやすい状況をつくった。近年、欧米のいくつかの大学においては、Methodology of Economics あるいは Philosophy of Economics という講座名で、主として、科学哲学における方法論の経済学理論への適用が論じられている。方法論に関する販路の増大が方法論への関心を高めたという「セイの法則」(Pheby, 「日本語版への序」v 頁) が働き、それに応えるべき書としてここで取り上げた両書が生み出されたのである。

Pheby は、*Methodology and Economics* の序において、この間の事情をとりあげている。彼によれば、方法論を研究しようとしたとき、「明快で理解しやすい入門書が欠けて」(p.x, 邦訳, xvi 頁) いたことが、彼をして本書を書かせたという。Pheby の書は、帰納主義・演繹主義から始まり、反証 (Popper), Kuhn, Lakatos, Laudan, 道具主義 (Friedman), オーストリー学派 (L.V. Mises), Marx, という順序で主として個人の方法論を中心として、その解説、批判、経済学との関係という構成で述べられている。しかしながら、こうした入門書としての本書は、その意味では成功していない。というのも、「本書の内容を理解するには、実は、それらの文献のたとえ一冊であってもまえもって精読しておかなければならないからである。」(訳者解題, 240 頁) このことは、学部学生の講義に 2 年間、本書を用いた私の経験からも実証される。しかしながら、これは、本書の欠陥ではない。むしろ経済学研究に志をもった大学院生、あ

るいは方法論に幾分かの気懸かりを感じる研究者にとっては、含蓄されている内容の豊富さから格好の案内書となっているのである。

ところで、いかなる著者も、たとえそれが解説書にすぎないことわかっていても、なにかしらの自己主張を織り混ぜるものである。Pheby の本書の第二の目的は、「『自然主義』を批判し、それに代わる可能な方向のいくつかを示唆すること」(p.xi, 邦訳, xviii 頁)にある。そして、「もし私達が経済学をいっそう有機体として考察するならば、そのとき方法論上の意味合いはまったく急進的なものとなる」(p.x, 邦訳, xv 頁)のである。Pheby によれば、これまでの支配的な経済学は「自然科学を真似る」(p.x, 邦訳, xv 頁)という「科学主義」あるいは「自然主義」の流れのなかで、モデルを構築するということにあまりにも精力が注がれてきた。こうして現代の主流派経済学に批判を向ける Pheby は Laudan に注目する (p.54, 邦訳, 121 頁, p.130, 邦訳, 228 頁)。しかしながら、Laudan の方法論は「何でもよい」という状況を許すことになり (p.80, 邦訳, 142 頁)、この点の解決を Pheby がとりあげていないのが残念である。また、本書だけでは Laudan の提唱する「研究伝統 (Research Traditions)」が経済学では何に相当するのか判然としない—Laudan は、マルクス主義や資本主義を考えている (訳者解題 248 頁) が、それではあまりにも多くのことを含みすぎる。このように、Pheby の「解説書」に込めた第二の目的も本書では十分に達成されているとはいいがたい、が、しかしそれを本書に要求するのは、第一の目的からすれば、法外なことになるのかもしれない。むしろこの第二の目的は、今後の Pheby 自身の研究を待つべきものであろう。

入門書としての読者の関心を最後までつなぐ構成法について、ひとつのアイデアをつけ加えておきたい。

本書では、第1章で全体の基調をなす演繹法と帰納法が、そして主義としての演繹主義と帰納主義が説明されている。そしてそこで「生得観念 (Innate Ideas)」(p.15, 邦訳, 26 頁)の問題と「帰納の問題 (the Problem of Induction)」(pp.7-13, 邦訳, 12-22 頁)が取り扱われる。これが、本書の長所の一つになっている。Popper については、彼自身の思想の展開がそうであったがため、「帰納の問題」を受けてその方法論が展開されているが、他の論者についても、これをフィルターとして、それぞれの方法論を浮き彫りにする手法が採用されていたならば、初学者の興味を一層ひいたであろう。

Redman の *Economics and the Philosophy of Science* も、Pheby と同じような狙いをもっている。Redman が本書に込めた二つの目的のうちのひとつは、「科学哲学の概説書や教科書がほとんど存在しない」(p.5) ため、「歴史家、社会学者および哲学者の間にある知識のギャップを埋めるために、(略) 読み易いかたちで」(p.5) の書物を著すということであった。いまひとつの目的は、「科学に関する素朴な 17 世紀的見解が依然として社会科学において影響力

をもっている（略）。（略）とりわけ経済学は、17世紀の物理学に根ざした誤った科学観である『科学的方法』というものを大いに利用することによってその科学的身分を主張しているが、このような主張は支持できるものではない。」(pp.4-5)ということである。しかしながら、これらの目的に対しても Pheby と同じような結論にたどりつく。つまり、第一の目的は成功していない。それは、本書はそれぞれの専門家にとって「読み易く」ないのである。方法論の研究者にとっても、本書は中級の書物である。そしてそれは、Pheby と同様、込められた内容の豊富さによる。また、本書が原典に語らしめるという形式をとっていることに関して二つの特徴がある。その一つは、本書が経済学者にとって常備の書としての価値を有しているということである。それは、本書が、幅広い文献から、多くの引用を引いて各章が組み立てられていること（引用文の量は、内容のほぼ90%を超えるであろう）から生じる。このことには、いくつかの効用がある。本書を読了することは、相当量の文献を渉猟したことに匹敵する（ただし、実際の著作を読むことに取って代わるものではないという Redman の注意がある。p.5）。またこのような形式の本書は、方法論についての記憶のメモとしても役にたつ。特徴のいま一つは、ここに引用されている文は、どれもそれぞれの論者の珠玉のものであるということである。われわれは、それらを味読することによってそれぞれのエッセンスに触れることになり、深い刺激をうけることになる。

しかしながら、もちろん、こうした形式には危険も存在する。そして、それは Redman の第二の目的とも関係がある。Redman は、このような形式を採用した理由を次のように述べる。「原著者自身の言葉を繰り返すことは、（略）彼らの見解の歴史を明確に叙述するためには最も正直で正確な方法であるように思われるし、また私自身の解釈に支持を得ることにもなる。」(p.vii) しかし原典の論者をして語らしめることは、一見、客観的にはみえるが、引用の作業過程においてまさしく主観的なのである。

Redman の書は、二部構成となっており、まず科学哲学が説明される。その最初に、何が問題なのかが取り上げられるが、Redman は、経済学における物理学主義的な「科学的方法」観に反対の立場を表明し (p.5)、以下、これが本書の基調となる。このことは、叙述の構成にも体现され、論理実証主義の衰退が取り扱われた後、科学哲学の通常の解説書とは異なり、科学の社会学的な説明として、Polanyi, Fleck, Kuhn が取り上げられる。ここで、Redman が「論理実証主義」と「論理経験主義」の峻別について注意を促している (p.7) ことを述べておかねばならないであろう。次いで、Popper 学派として、Popper, Lakatos, Feyerabend, Bartley の各所論が述べられる。Popper とウィーン学団の相違点 (p.58) ならびに Popper と Lakatos の相違点 (p.69) の表が掲げられているが、これは初学者にとって理解を助けるものである。科学哲学論争は、科学史の解釈においても影響を及ぼした。Toulmin と Hanson はそうした文脈

で取り上げられている。そして、第一部の結論においてもまた、「私の探求の最も重要な機能が、われわれの社会において作用している科学のイデオロギーと呼ばれているものと闘うことである」(p.87) という主張が繰り返されるのである。

第二部は、科学哲学が与えた経済学への影響が述べられる。まず、経済学に対する哲学の初期の影響が取り上げられ、次いで、Popper の主張する批判的合理主義思想の経済学に与えた影響が分析される。その結果、経済学においては反証が成功しない (pp.116-129) がため、Popper 自身も含めてさまざまな批判的合理主義の変種が経済学で生じ、その混乱ぶりが描写される。科学哲学において、自然主義的科学主義の反テーゼの一つは、「合意 (Consensus) としての科学」観である。ここでは、Lakatos は、系譜的には競合する Kuhn とともに取り上げられている。Redman は、Popper 流の科学主義に与しないが、さりとて「合意」のもとでの科学活動を支持するわけでもない (p.167)。Redman には、どんな専門分野も真に十分発展した批判的伝統をもっていない、という確信がある (p.179, n.20)。本書における Redman の最終的な主張は、「科学的合理主義」ということになる。「成功のための方策は、得られた成果のなかにはない。もしわれわれが科学を進歩させるためになしうることを本当に知りたいと思うならば、われわれは、科学的合理主義一寛容さ、誠実さ、個人の進歩よりも科学の進歩を優先するという責務、批判を行なう自由に対する責務、進んで他人の言うことに耳を傾けて学ぼうとすることなど一という態度が保持され、それを一つの伝統にまで高めることができる。」(p.172) この結論は、相当の努力をはらってここまで読んできた読者には、二つの意味で失望感を与える。その一つは、著者の具体的な方法論的指針が見えてこないという苛立ちであり、いま一つは、こうした「批判的な科学的合理主義」こそが、実は実際の知識の獲得過程のなかで問われていたのではなかったのかという、振り出しに戻る徒労感である。

方法論の探求によって、われわれは一体何を得るのであろうか。このような疑念には、いつも不毛さが漂っている。こうした雰囲気の中で、あえてなにかを見つけだそうとする焦燥感をもつ私の、両著者の第二の目的に対する批評は、入門書としての Pheby に、そして文献渉猟としての Redman に、きっと過度のものを求めているのであろう。そのことを別にすれば、両書は、科学哲学論争とそしてそれが経済学に与えた影響についての丹念な解説書としては他に類をみないものである。自己の研究の方法にいきさかでも内省の念を有する人、また、特に「反証主義」を脅迫観念と感じている人にとっては、両書は必読の書物である。